



うちのイチ押し！

市民とともに歩む『大阪の宝』—歴史が息づく都市の魅力

日本の都市として稀に見る長い歴史を歩んできた大阪には、時代を越えて受け継がれてきた「大阪の宝」が数多く存在します。大阪の人々の営みの中で育まれてきた「大阪の宝」。そこに込められた歴史と文化・芸術の物語、「大阪の宝」ストーリーをご紹介します。



●「大阪博」Webサイト

<https://osakahaku.ocm.osaka/>



大阪博を開催する6つの博物館・美術館：

大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立科学館、大阪歴史博物館、大阪中之島美術館

住所

〒540-0008 大阪市中央区大手前 4-1-32
大阪歴史博物館内
地方独立行政法人大阪市博物館機構 経営企画課

電話

6940-0569

「大阪の宝」ストーリー

大阪は、都市として長い歴史を歩み、「民」の力により発展してきた都市です。

約150万年前に誕生した瀬戸内海の東側玄関口に位置し、淀川・大和川が流入する国内外の交通・物流・交流の拠点として、6世紀以降は、難波津や難波宮が設置され、国際都市になりました。

16世紀には豊臣秀吉が大坂城を拠点に全国統一を実現し、政治・経済・文化の中心地になり、江戸時代には、町人の都市として発展します。町人は、町運営の主体となって経済を支えただけでなく、文化・芸術活動を支え、多様な食や優れた芸能を普及します。このような文化的土壌は、市井の人びとによって育まれたものでした。

その後、近代には重工業都市として発展し、1925年には日本最大の人口を抱える大都市へと成長。この繁栄を支えたのがやはり「民」の立場の人びとであり、彼らによって貴重な美術品・資料などの優れたコレクションが形成されました。太平洋戦争の影響を受けながらも復興を遂げ、1970年の万博を契機に未来への指向が高まり、現在に至ります。

この間、「民」の立場の人びとの手によって収集された優れたコレクションは、大阪市博物館機構の6館に継承され、代表する収蔵品として市民、そして世界に発信を続けています。

たゆみない歴史を積み重ねてきた大阪。それを象徴しているのが、「大阪の宝」です。大阪市博物館機構では、2025年大阪・関西万博に合わせて「大阪博」を開催し、機構の6館が厳選した「大阪の宝」を公開します。ぜひ大阪博のWebサイトをご覧ください。

大坂城石垣のたのしみ —「大阪城 豊臣石垣館」いよいよオープン—

令和7年4月1日、大阪城公園にあらたに文化財の展示施設、「大阪城 豊臣石垣館」がオープンします。

大阪城公園の大部分は、「大坂城跡」として国の特別史跡に指定されています。その大きな特徴として、豊臣秀吉が築いた大坂城と徳川幕府により築かれた大坂城、2時期の城が同じ場所に重なって存在しているということがあげられます。豊臣期の大坂城は、大坂夏の陣で落城した後、徳川幕府による大坂城再築に際して、盛土により完全に埋められたため、現在、地上で見えることはできません。「大阪城 豊臣石垣館」は、この地中に埋没している豊臣期大坂城の石垣の一部を発掘調査により掘り出し、常時見学していただけるよう整備された施設です。

施設のオープンにより、豊臣期・徳川期2時期の石垣を実際に見てくらべることができるようになります。2時期の石垣の主な違いとして、使用されている石材や角部分の積み方の違いなどがあげられます。豊臣期の石垣は大部分が野面石(自然石)を使用していますが、徳川期の石垣は割石を使用しています。角部分は、いずれも角石の長手方向の向きを交互に変えて積み「算木積み」という技法が使われていますが、豊臣期は形状がさまざまな石材を角石としているのに対し、徳川期は直方体に精緻に加工した石材を角石とし、その脇に角脇石と呼ばれる石材を配置して、さらに角石の角度が石垣角部分の稜線に対してほぼ直角になるように積むことで、高い強度を生み出しています。こうした石材の加工技術や石積み技術の進展によって、より高い石垣を築くことができたのです。

高さでは徳川期の石垣に及ばない豊臣期の石垣ですが、さまざまな形・大きさの石材1つ1つの特徴を見極め、巧みに組み合わせて積み上げていった石工の高い技術を感じることができます。春の訪れとともに咲く大阪城公園の花々とともに、ぜひ大坂城跡の石垣をたのしんでいただきたいと思います。(大阪市教育委員会事務局 文化財保護課)



公開される豊臣期石垣



おおさか

歴史
探訪

198

大阪の史跡や歴史資料を毎月連続でご紹介します。